音大生のキャリア戦略

音楽の世界で
これからを生き抜いてゆく君へ

Life in the real world:
How to make music graduates employable

ドーン・ベネット 編著
Dawn Bennett

久保田慶一 編訳
Keiichi Kubota

春秋社

はじめに

スーザン・トムズ

これから音楽家としてキャリアを積んでいこうという、現代の音大生や若い音楽家には、ぜひとも本書を読んでいただきたいと思います。私が学生だった頃は、このような本はありませんでした。私が大学を卒業したときも、卒業後どのように生活していくのかと尋ねてくれる先生は誰一人としていませんでした。先生たちは「まるでもう関係ないわね」と言わんばかりに、「さよなら」と手を振っただけでした。私はわけがわからず、音楽の世界に飛び込み、長い間この世界にいます。そしてこの複雑でミステリアスな世界で、いかにお金を稼ぐことが難しいのかを、ゆっくりではありましたが、苦労を重ねていくうちに学んだのです。

私は幸運にも、とても革新的な音楽家グループ「ドームス Domus」の仲間となりました。彼らは一風変わったコンサートをやっていました。自分たちでドーム型のテントを張り、コンサートホールのない地域にそれを持ち運んで、（移動ピアノ、ステージ、クッションの完備された）ドームの中で自分たちが大好きな室内楽のコンサートを開催したのです。ときにはお客さんに飲食を提供したこともあります。

このプロジェクトは音楽家としての生活のいい面と悪い面の両方を、教えてくれました。いい面というのは、新しいやり方で予想もできないことを作りだしていたことに、私たち全員がものすごく満足していたことです。私たちのやっていることを理解してくれて、クラシックの音楽や音楽家の見方が変わったと言ってくれる、お客さんに出会えたことは、本当にすばらしかっ

たです。

しかしその反面、何か新しいことをするには、準備や運営に手間暇がかかること、そして資金援助がないなかで、何か新しいことをするのにとてもお金がかかることも、身をもって知りました。週末に自分たちの報酬を分けるのですが、ほとんどお金が残らなかったのを今でも思いだして、とても辛い気持ちになります。でも、ようやく真実と呼べることを学んだのです。それは今でも真実だと思っています。それは、音楽の世界では、評判と報酬との間には絶対と言える関係がないということです。あなたもきっとすぐにでも有名になって称賛されるようになれますが、金銭的に安心できるかどうかは別の問題なのです。

音楽というのは、小さい頃から訓練をしますので、音大生は決して普通の人ではありません。大学を卒業するまでに、練習と演奏だけに相当な年月を費やしているはずです。音楽をしていない友人たちよりも、多くのことを経験しているはずです。というのも、彼らは卒業して仕事に就きますが、新しい職場ではいちから教育しなくてはならない初心者としてしか扱われないからです。これに対して音大卒業生は、この年齢ですでに立派な音楽家になっていて、演奏家として生活することすらも望めるようになっているのです。

本書でも述べられているように、音楽大学の中だけで生活していると、どれだけ多く演奏のチャンスがあるのか、そしてそれらを掴むのがいかに簡単であるのかについて、非現実的な印象しか得られません。私の経験から言えることですが、実社会に出た最初の数年は、孤独で、不安でたまらないものです。多くの音楽家がそうであるように、その昔私も、一人だけの練習室であってもすばらしく演奏できれば、音楽事務所や聴衆の関心を引けるのではないかと思っていました。チャンスを待っている私が練習室にいることを、彼らはきっとわかってくれるにちがいないと考えていたのですが、実際にはそんなことにはなりませんでした。しかしテクノロジーの発達した現在はどうでしょう。Facebook、Twitter、YouTube など、これから登場するネットワーク・ツールを使用すれば、私の才能を世界中に知ってもらうのも、いとも簡単でしょう。必要なのは、企画力と将来の見通しだけです。

今日の音楽の教師たちが本書を読めば、若い音楽家たちにはさまざまなキャリアを積むためのスキルを与える必要があることに、気が付くでしょう。現在の経済状況では、さまざまな仕事でポートフォリオ・キャリア portfolio career*1 が必要となり、音楽もその例外ではありません。本書でも強調されていますが、音楽家たちは、オーケストラ、バンド、室内楽アンサンブルなどの活動で培った、さまざまな職業で活用できる汎用的スキルを、もっと自慢に思うべきです。リハーサルや公開演奏会の経験は、本人たちが意識しなくても、多くのことを教えてくれたはずなのです。

音楽家たちは自律的に物事が考えられますし、チームで働くこともできますし、集中する方法も学習しています。遠い目標に向かって辛抱強く取り組むこともできますし、ネットワークの作り方も知っています。コミュニケーション力もあり、自己アピールもできます。複雑な日程も調整できますし、緊張や不安をコントロールすることもできます。そして仲間たちの会話するときの社交辞令をも、心得ています。こうしたことすべてによって、音楽家たちは、音楽以外の仕事においても、その仕事のさまざまな領域でうまくやっていけます。

本書でも「キャリア戦略」について多くのことが語られると思いますが、音楽というのは、実際のところ、誰でも築けるキャリア career（仕事）というより、ヴォケーション vocation（天職）なのです。若い音楽家の人はこのことに気付いてもらいたいと思います。あなた方は音楽を愛することで、仕事が不確実であてにならなくて失望してしまうような状況にも、きっと耐えられるからです。音楽は確かな仕事ではありませんし、将来もきっとそれは変わらないでしょう。しかし音楽の仕事は大いに満足を与えてくれますし、それはほかのどんな職業よりも大きいのです。音楽の世界は深く、常に演奏家を夢中にさせ、満足させてくれます。多くの人々が心から音楽を愛し、その音楽を聴かせてくれる演奏家をも、愛してくれているからです。

＊1　ポートフォリオあるいはポートフォリオ・キャリアについては、本書の第 2 章の＊1を参照。

スーザン・トムズ

イギリスの著名なピアニストのひとり。ケンブリッジのキングズ・カレッジで音楽を最初に学んだ女性としても知られる。ソリストやコンチェルト・プレイヤーとして活躍し、リリースした CD は 50 以上。そのうちの多くが国際的な賞を獲得している。とりわけ室内楽での評価が高い。15 年に渡って室内楽グループ Domus のピアニストを務め、1993 年からはゴーディアー・アンサンブル Gaudier Ensemble に参加した。さらに 1995 年から 2012 年までは、世界をリードする、また録音数も多いトリオ、フロレスタン・トリオ Florestan Trio に所属した。ヴァイオリンにエーリヒ・ヘルバルトを迎えてのモーツァルト・シリーズはひときわ高い評価を得た。

スーザンは「音符を超えて Beyond Notes」（2004）、「音楽家のための初歩 A Musician's Alphabet」（2006）、「静けさの中から Out of Silence」（2010）という、演奏論の著書でも知られている。最後の本は、日本のピアニスト、小川典子によって翻訳されている（春秋社、2012 年）。スーザンの著書は、ケンブリッジとオックスフォードの両大学、さらに通信制のオープン大学などでの演奏論の授業で読まれている。「Times Literary Supplement」は「スーザンは音楽書では珍しく、ひときわ人間性をよく理解している」と評している。

スーザンは教育者としてもよく知られている。ロンドンでは毎年マスタークラスを実施し、世界中のアンサンブル・グループが参加している。またイギリスのほとんどの音楽大学でマスタークラスを行っている。また彼女は BBC のラジオ 3 とラジオ 4 で番組を担当したり、「The Guardian」や「The Independent」にも寄稿したりしている。また国際的なコンクールの審査員を努め、セミナーを開催し、ウェブサイトでブログを公開している。

（www.susantomes.com）

日本の読者のみなさんへ

ドーン・ベネット

私たちが本書を出版したのは、音楽大学のカリキュラムにエンプロイアビリティ employablity（さまざまな職業で通用する能力）*1 という考えを浸透させ、学生さんたちの人として、そして職業人としての発達を支援したいという熱い思いからでした。私がこの問題について議論しはじめたのは、2006年の「国際音楽教育学会 International Society for Music Education（ISME）」(1) における「プロの音楽家の育成部会 Commission for the Development of the Professional Musician」(2) に参加したときでした。そして私たちは今もって次のように信じています。すなわち、自分自身の価値、キャリア、チャンス、コミュニティを認識できる若い音楽家を育てることで、彼ら・彼女たちのすぐれた音楽性の育成を阻害してしまうことはないと。そればかりか、自分が演奏する音楽や音楽家であることを冷静にかつ客観的に見ることができる若い音楽家は、人として意味のある、そして経済的にもやっていける音楽の未来を創造することができるのです。

本書が出版されてから6年ほどたちますが、今回、久保田慶一氏の努力で日本語訳が出版されることになりました。また初版が出版されてからの情報も、翻訳では追加されていますので、よりアップデートされた内容になっています。私たちは久保田氏といっしょに仕事をできたことを心より喜び、日本の音楽大学関係者や学生さんたちに、本書を読んでいただける機会を得られたことに、深く感謝しております。

本書の初版には第1部として今回日本語訳された8つの章が、そして第2

部として実践のための教材や資料が含まれていました。しかしこれら実践教材は欧米の学生用に作成されたものであって、日本の学生さんにはあまり役にたたないのではないかという久保田氏の指摘を受けて、日本語版ではこの第 2 部を割愛することにしました。しかし第 2 部に掲載された教材や資料は、「ミュージック・ツール・キット music toolkit」(3) からオンラインで入手可能ですので、興味のある方はぜひアクセスしてください。またこの「ツール・キット」の他にも、インターネット上には学生さんや指導者の方が利用できる資料や教材が入手できるサイトがありますので、大いに活用してください。

この「ミュージック・ツール・キット」には英語で書かれた 34 の教材や資料が収められていて、次のように分類することができます。

第 1 部：自己理解から職業へ
第 2 部：職業から社会へ
第 3 部：仕事を創出して持続させるためのスキル

これら教材や資料は、大学教員や学生なら無料で入手できます。ご覧になっていただければ、私たちが「エンプロイアビリティ」と呼んでいるものが、どのようなものであるのかが、おわかりになると思います。学生さんはきっと、自分自身が音楽のプロとしても社会人としても立派にやっていけるという自信がもてるようになり、また社会人として成長していけることでしょう。

最後に改めて、日本の読者の方々に本書を読んでいただけることに感謝します。そして世界中の多くの音楽大学がこれからもずっと発展していくことを、心より願っております。

2018 年 4 月

（1）　https://www.isme.org/
（2）　https://www.isme.org/our-work/commissions-forum/education-professional-musician-commission-ceprom
（3）　https://developingemployability.edu.au/toolkit/

訳注

＊1　エンプロイアビリティについては、第 5 章の＊1 を参照。

編訳者まえがき

久保田慶一

本書はオーストラリアの音楽教育学者ドーン・ベネット氏の編纂により、2012 年に出版された“Life in the Real World: How to Make Music Graduates Employable”の翻訳書です。ベネット氏以外に、アメリカ、カナダ、イギリス、オランダの 7 人の音楽教育学者、音楽家、音楽キャリアカウンセラーなどが寄稿しています。内容については、第 1 章で第 2 章以降の概略が説明されていますので、まず第 1 章を読まれるといいかもしれません。

原著の題名を直訳すると『実世界での生活：音大卒業生が雇用されるようにするための方法』となります。少しかみ砕いて説明しますと、「実世界（リアル・ワールド）」とは職業世界のことです。音楽大学を卒業して、音楽家としての仕事をして働かなくてはならない世界のことです。そして英語のエンプロイアブル employable は、翻訳することが難しい言葉ですが、エンプロイ employ つまり雇用されることができる状態のことです。最近の日本でも「エンプロイアビリティ」という言葉がしばしば聴かれます。エンプロイアビリティが高いということは、どんな職業にも通じる能力が高いということになり、それだけ転職が容易になるということです。これによって職業的な流動性が高まるということでもあります。

では音大卒業生をエンプロイアブルにするというは、どういうことでしょうか。要するに、エンプロイアビリティを高めるというのは、音楽の演奏や創作以外の、つまり非音楽的な能力を高めましょうということになります。スーザン・トムズさんも「はじめに」書いておられるように、音楽を学ぶ過

程で音楽以外の能力、例えば、コミュニケーション力、ひとつのことに専心できる能力、人前で発表できる能力などを培っているわけです。その意味で、音大卒業生はエンプロイアビリティが高いと言えるかもしれません。だからこそ、音楽とはほとんど関係のない、一般企業でも十分に働いていけるわけです。しかし本書では、その能力をできる限り音楽活動に活かす方法を教えてくれています。

今回日本語に翻訳したのは、原書の Part1 のみです。Part2 には、資料やキャリア・カウンセリングに必要なワークシートが多数掲載されています。これらは内容的に欧米の音楽大学生や若い音楽家向けに作成されているため、日本の学生や若者には必ずしも適合するものではないと判断し、ベネット氏の許可を得て、翻訳書では掲載しないことにしました。幸いなことに、ベネット氏が日本の読者に寄せたメッセージにも書かれているように、インターネット上で読むことができますので、関心のある方はぜひご覧になってください。その代わりというわけではありませんが、8 人の著者の方々には、初版の 2012 年以降の状況について、日本語版用にパラグラフを新たに執筆してもらいました。というのも、2008 年に起こったリーマンショックによって、世界経済は低迷しており、若い音楽家のキャリアにも大きな影響を及ぼしていると考えられるからです。その結果、日本語版は初版の改訂版のようになっており、ベネット氏は私を共同編者として名前を記載することを、提案してくださいました。

原書ではインターネット上のサイトが多数紹介されていますが、翻訳書では参考文献のみを掲載しました。現在閉鎖されているサイトも多く、日本の読者に混乱を与えるだけと判断して、割愛いたしました。また学校名の翻訳に際しては、音楽大学、音楽学部、そして音楽院という 3 つの訳語に統一してあります。ご了承ください。

2018 年 5 月

目　次

はじめに　スーザン・トムズ　i
日本の読者のみなさんへ　ドーン・ベネット　v
編訳者まえがき　久保田慶一　viii

第1章　音楽、音楽家、キャリア　3

ドーン・ベネット　アンジェラ・ビーチング　ロジー・パーキンス
グレン・カールーザース　ジャニス・ウェラー

はじめに　3
歴史は繰り返す？　4
音大生のキャリア再考——将来も自分らしくあり続けること　7
アメリカで学んだ音楽家——教育、チャンス、産業界の変化　7
決められた道筋、それとも紆余曲折——プロの音楽家への道　7
生き延びるためのスキル・資質・やる気　8
社会とつながる音楽家　9
時代の変革と生涯学習へのチャレンジ　10
音楽家のプロティアン・キャリアを考える　10
おわりに　11

参考文献／訳注　12

第2章　音大生のキャリア再考
将来も自分らしくあり続けること　13

ロジー・パーキンス

音楽家にとっての「キャリア」をもう一度考える　15
「内在的」キャリアにズームする　18
内在的キャリアの実際――ジャックの場合　20
音楽教員と音楽大学への示唆（その1）――振り返りとその時間の必要性　27
音楽教員と音楽大学への示唆（その2）――内在的キャリアの各側面の発達　29
おわりに　31
謝辞　32

参考文献／訳注　33

リーマンショック後の状況　36

第3章　アメリカで学んだ音楽家たち
教育、チャンス、産業界の変化　39

アンジェラ・ビーチング

成功とはなにか？　39
現代の音楽家をプロファイルする――成功の再定義　40
労働市場――供給と需要　46
アメリカの音楽業界の状況　47
クラシック音楽文化の変化と聴衆　48
テクノロジーが仕事を変える　49
求められる高度なティーチング・アーティスト　50
アメリカの音楽大学　53
高額な学費　55
カリキュラム　56
キャリア支援プログラム　59
おわりに　60
若い音楽家へのアドヴァイス（「してはいけないこと」と「すべきこと」）　61

参考文献／訳注　62

リーマンショック後の状況　63

第4章　決められた道筋、それとも紆余曲折　65
プロの音楽家への道

ジャニス・ウェラー

「大人になる」をもう一度考えてみる　68
教育家とキャリア相談のための実践的指南　72
　プロ意識　72
　コミュニケーション力をつける　74
　さまざまな人たちのための演奏会　75
　教えること　76
　ネットワーク作りと社会参加　76
　インターネットとソーシャル・ネットワーキング　77
おわりに　78

　参考文献／訳注　79

リーマンショック後の状況　81

第5章　生き延びるためのスキル・資質・やる気　83

ドーン・ベネット

音楽文化産業における創造　85
オーストラリアにおける雇用とエンプロイアビリティ　86
　音楽大学やその他の学校　87
　オペラ団体とオーケストラ　88
オーストラリアにおける音楽職業教育　91
重要なスキルと資質　94
　ビジネスと起業　94
　コミュニケーション力　95
　演奏とやる気　96
おわりに　97

　参考文献／訳注　100

リーマンショック後の状況　101

第 6 章　社会とつながる音楽家　103

グレン・カールーザース

現代社会におけるクラシック音楽家　106
カナダの音楽大学・学部　108
カナダにおける音楽の生産と消費　109
音楽の仕事の王道　112
　オーケストラ・プレイヤー　112
　大学教員　114
ケーススタディ――マリーの場合　116
おわりに　120

　参考文献／訳注　125

リーマンショック後の状況　127

第 7 章　時代の変革と生涯学習へのチャレンジ　129

リネーケ・スミルデ

時代の変革と生涯学習へのチャレンジ　130
音楽シーンとプロの音楽家　133
　文化政策　135
　聴衆　136
　テクノロジー　136
　音楽教室における教育　137
　コミュニティ活動と諸芸術のコラボ　138
変化に対応するヨーロッパの音楽大学　139
　教育システム　139
　学生のニーズへの対応　140
　国際的流動性とボローニャ・プロセスがもたらしたチャンス　143
音楽家のための生涯学習　144
　音楽家の学習スタイル　145
　音楽家のリーダーシップ　145
3 人の生涯学習者の例――イザーク、ダニエル、ウェンディ　146
　イザーク　147
　ダニエル　148
　ウェンディ　150

再考・音楽家の役割　152
　教育的リーダーシップ　152
音楽家の未来のための戦略　154

　参考文献／訳注　156

リーマンショック後の状況　158

第8章　音楽家のプロティアン・キャリアを考える　161
マイケル・ハンナン

私の人生　164
ビジネスの世界に入る　168
研究の世界へ　171
音楽を言葉で表現する　172
教えること　173
さらなる研究　175
ようやく定職に　177
アカデミックな世界　180
おわりに　183

　参考文献／訳注　185

リーマンショック後の状況　188

編訳者あとがき　191

索引　199

音大生のキャリア戦略

音楽の世界でこれからを生き抜いてゆく君へ